

¹²³I-BMIPP 心筋シンチグラフィ 後期像が 心筋障害診断に有用であった冠攣縮性狭心症例

新井 芳行^{*} 水野 清雄^{*} 大里 和雄^{*} 村上 達明^{*}
守内 郁夫^{*} 丹尾 裕^{*} 郭 文治^{*} 高橋 美文^{*}
大中 正光^{*}

〔はじめに〕

冠攣縮性狭心症例において、冠攣縮により生ずる心筋障害が¹²³I-BMIPP心筋シンチグラフィにより鋭敏に検出できることは、既に本研究会において報告した。今回我々は、¹²³I-BMIPP心筋シンチグラフィ後期像がより鋭敏に心筋障害を検出し得た症例を経験したので、心筋障害検出能を早期像、後期像と比較した。

〔総括〕

¹²³I-BMIPP心筋シンチグラフィによる冠攣縮性狭心症例における心筋障害検出能は後期像がより鋭敏である可能性が示唆された。

〔症例提示〕

症 例：58歳、男性

主 訴：胸部絞扼感

家族歴：特記すべき事無し

既往歴：特記すべき事無し

現病歴：1996年1月頃より安静時の胸部絞扼感を認めるようになり、近医を受診し狭心症を疑われ、当院へ精査加療目的に紹介となった。冠動脈造影検査上右冠動脈の攣縮が誘発され、冠攣縮性狭心症と診断された。¹²³I-BMIPP心筋シンチグラフィ上、後下壁にRI取り込み低下が認められたが、その取り込み低下は3時間後の後期像でより著明であった(Fig. 1~4)。

〔結果〕

VSA 42例(男33例、女9例、平均年齢61±8歳)に対して、安静投与後約30分から早期像(42例)を、4時間後から後期像(7例)を撮像した。早期像では34例(81%)に、後期像では6例(86%)に集積低下を認めた。集積低下部位と攣縮誘発冠動脈灌流域の一致は早期像31例(71%)、後期像6例(86%)といずれも後期像が高率だった(Fig. 5)。

* 福井循環器病院 内 科

症例 M. S. 58 才 男性

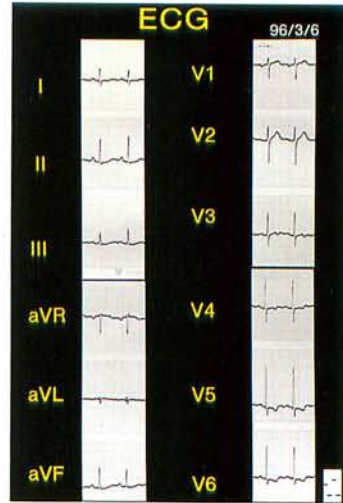
主訴 胸部絞扼感

家族歴 特記すべき事無し

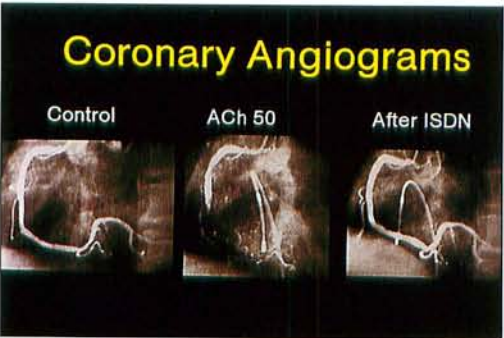
既往歴 特記すべき事無し

現病歴 1996 年 1 月頃より安静時の胸部絞扼感を認めるようになり、近医を受診し狭心症を疑われ、当院へ精査加療目的に紹介となった。

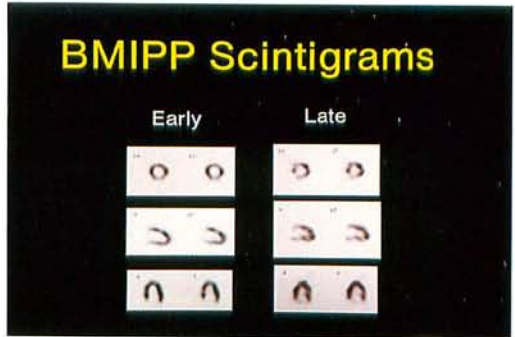
▲ Fig. 1



▲ Fig. 2



▲ Fig. 3



▲ Fig. 4

	心筋障害検出率	灌流域一致率
Early Image	34/42 (81%)	31/42 (71%)
Late Image	6/7 (86%)	6/7 (86%)

▲ Fig. 5